荒尾市立府本小学校　校長便り　№88

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年4月10日(金)

《雑感》責任が人を育てる

本校は主体性、協働性、創造性を視点として学校づくりを行っています。この視点から「気づき、考え、行動する。」ことを意識させて活動をさせていきます。行動が主体的であるからこそ、その実りも大きいものです。

ある本にこんなフレーズがありました。「職業はその道に入った人間をそのように造って行く。そういうものだ。」責任を与えることで人間は変わるということです。人は課題を自分のもの（主体性や当事者意識）と捉え、やりがい（自己有用感）を感じ、結果や成果を目指し、仲間と力を合わせて（協働性や担当者意識）頑張っているのです。与えられた責任は、それを果たそうと必死で努力して、何とか結果を出すのですね。私も上司の命令に対し、間違いではないかと感じた時は必ず自分の考えを伝えていました。しかし、納得できなくても命令にはまず「はい。」の返事からと肝に銘じていました。そして結果を出すために努力します。その様なことの積み重ねが今の自分を作ってくれたような気がします。仕事がどれだけ増えても何とかするものですね。

子ども達は私達大人の姿を見て成長していきます。子ども達に対し恥ずかしくないよう、責任を果たせているか自戒する必要があります。

本校において、低学年の子が責任を果たす高学年に憧れ、自分もそうありたいと願い、良き伝統が続いていくことを願っています。

【雑感】ヒューマンスキルの向上

若い頃、20代後半、自分が結婚したということもあって仕事に対する考え方が変わった。自分が一家の大黒柱であること、仕事をして対価として給料を戴くことを考えると、仕事に対する真摯な姿勢は絶対に必要だと考えたのだ。それまでの自分はかなり適当な仕事をしていたような気がする。

教職のテクニカル・スキルアップを図るため、30代前半は多くの教育書を読んだ。優れた実践を真似ることで授業の流し方を学び、自分自身のカラーを織り込んでいった。併せて多くの研究発表を見て、何となく授業が流れるようになった頃である。

30代後半、何かが足りないと感じ始めた。何が足りないか自分では分からなかったので、多くの先輩方と語り合う中でその答えを探そうとしていた頃である。私が頼った先輩方は、いつもにこやかに、そして優しく多くのことを教えてくれた。大変勉強になったのだが、殆どの先生方は授業の流し方の工夫や生徒指導、学級の切り盛りについて教えてくださるだけだった。自分に足りないものは何なのかは、とうとう分からずじまいだった。

何が自分に足りないのか分からないまま、40代後半まで時は流れることになった。この頃若い時に多くのことを教わった先輩方のことをよく思い出しているのだが、その先輩方に共通しているのは「話しかけやすい人」、「優しい人」、「分かりやすい人」、「自分の考えだけを押し付けない人」、「向上心のある人」ということだ。いわゆる「人たらし」という先輩達だったように思う。言い換えるならば、私に足りないものを持っている人達だったような気がしている。

若さは爆発的なエネルギーを包含していて、頑張ろうという気持ちさえあればそれなりのレベルまでテクニカルスキルを上げることができる。しかし、ヒューマンスキルはどうだろう。スキルアップを図ろうとしても一朝一夕にはいかないのではないだろうか。ということは、日々の生活の中で自分自身の人格を磨き続けることが重要だと思う。心がけて生活していきたいものだ。

シリーズ「自分を語る」#88

さて、次はペルーからの研修員受け入れに行きましょう。この研修員の希望は、観光です。ペルーといえば、マチュ・ピチュ、インカ帝国、クスコ、ナスカ地上絵、ティティカカ湖…等が浮かびます。観光資源が多い国ですね。しかし、その資源を活かすことができなければ宝の持ち腐れです。そこで、日本の観光のシステムを学びに来られたという訳です。この研修員の名前は「上村エリカさん」です。名前から想像できますね、日系人です。移民によってお母様がペルーに渡り、現地の方とご結婚されたとのことでした。エリカさんの研修先は「九州産業交通」です。以前、研修員を受け入れて経験があったので、スムーズな研修が可能でした。明るく元気な方だったので、とても研修が楽しそうでした。

次は中国からの研修員受け入れです。中国からは「劉（りゅう）さん」です。研修希望分野は医療分野でした。外傷による言語障害、聴覚障害等の理学療法です。日本では理学療法（リハビリテーション）については理学療法士が行いますが、中国では医者が行うそうです。詳しいことは分かりませんが、劉さんは医者として働いていました。劉さんの研修受け入れ先は「熊本機能病院」です。前年度に中国からの整形外科医を受け入れていた関係で、劉さんもスムーズな研修をスタートすることができました。ただ、研修そのものは大変だったようです。日本語がよく分からないのに言語障害の理学療法を研修するのですからねぇ。彼女は自転車で渡鹿から機能病院へ通うことになりました。

海外技術研修員最後の一人は、ブラジルの歯科医「西坂幸一さん」です。名前から想像できる通り、日系2世です。彼はブラジル熊本県人会に所属し、日本語も日常会話なら問題なくできましたので、面接もスムーズに終えることができました。研修先は、熊本県歯科医師会、です。厳密には歯科医師会から幾つかの歯科医院に派遣されるのです。その代表が子飼の「伊東歯科医院」です。幸一さんは歯科医というより、口腔外科医、と言った方が良いでしょう。歯だけではなく、顎、顎関節、頭蓋骨に至るまでが専門だそうです。後に研修先訪問で知るのですが、顎関節不整合といって噛み合わせが極端に悪い場合、顎の骨を切って調整するのも口腔外科医の仕事だそうです。正に外科並みの手術室が完備されていて、私はもう小学生の見学旅行のノリで視察したことを思い出します。

こうして、全員の受け入れ手続きは済みました。これでめでたしめでたしでは面白くないですよね。受け入れが決定すれば、熊本での宿舎を決めなければなりません。この宿舎決定にも血税が使われますので、条件を満たした上で最も安く、利便性も考えて決定しなければなりません。そこで、数社から見積書を取ります。県庁からも各研修先からも近い宿舎が決定され、あとは研修員が来日するのを待つばかりです。（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）